カトリック教育研究第 41 号,2024,31-37

実践報告

NPO とのカトリック的探究学習
― 外部連帯による授業の創造的展開と召命の深め方 ―

山田 真人*

序論

日本の学校教育において総合的学習は学習指導要領が適用される学校全てで 2000 年から段階的に実施されている。その社会に開かれた学びの実践や具体的な内容の作成は、学校ごとに任されて展開している。さらに、大学入試では総合型選抜などの推薦入試が多くなり、授業外での活動や従来の座学中心ではない、体験型の学びが必要になっている。[1]

この流れの中で、カトリック教会の中で求められる教育の姿について並行して見ていきたい。教皇フランシスコは 2019 年、*"Global Compact on Education"*を発表し、教育が人々の中で平和、正義、お互いを受け入れる姿勢を生み出して欲しいとの意向を示している。その中で教皇は"educational village"という言葉を使い、社会に開かれた教育を提唱している。[2]

上述した状況の中で、カトリック学校が今日においてもカトリック学校としての姿勢を保ち、教育を続けるには、どのような形が必要か。今まではカトリック学校としての性格をカリキュラムに反映させる試みは、教会や修道会から導入され、一般教員は深く関わらなかった点もあるだろう。しかし、この状態ではカトリックのミッションを土台とした総合的学習や、それに基づく課外活動が教員内には浸透せず、学校外の社会と繋がっていくためには、教員の活動範囲では限界がある。そこで解決策の一つの候補として NPO 法人との協働を考えるのが、本実践報告の目的である。特定非営利活動法人聖母（以下、NPO 法人聖母）は、アフリカのマラウイの学校給食支援を 2016 年から展開する団体で、支援の一環でマラウイ産フェアトレードコーヒーの取り扱いを実施している。[3] その活動とカトリック学校が協働し、学校教育が社会に出ていく上で中間的存在として機能している。また、NPO 法人が関わることで、教会における実践司牧現場への繋がりもでき、福音的活動の架け橋にもなっている姿も同時に紹介する。そうすることで、企業と学校、NPO の具体的な繋がりを紹介できるだろう。NPO 法人聖母は、スタッフの人件費、営業費用等が支援企業の英国通信事業者 Mobell から提供され、コーヒーの販売などを通して得る寄付は、マラウイの給食支援に繋がっている。[4] また、生豆を提供するアタカ通商株式会社も、NPO 法人聖母の活動に賛同し、特に SDGs のゴール 1 の「飢餓をゼロへ」の取り組みでコーヒー産地の未来を支える子どもたちへの投資として協働をしている。こうしたビジネスを学び、代理販売者として学校が入ることで企業、NPO を通してまさに社会を体験する機会を、NPO 法人聖母は創出している。

*やまだ まこと 特定非営利活動法人聖母

本稿ではまず、サレジオ学院中学高等学校の事例を紹介する。課外活動として導入された国際支援活動が、ビジネスに関わる企業、消費者である保護者や関係者、カトリック学校と教員に繋がっていく姿から、人間を中心においた教育、社会に開かれた活動の例を紹介する。

次に、光塩女子学院中等科、高等科の事例を紹介する。ここでは特別講座という選択制科目で NPO との協働を実現し、中学校 1 年生から高校 2 年生が国際課題に取り組む例を紹介する。また、活動を教会のバザーでも広め教会とも繋がることができ、経験を大学の教授に発表する高大接続の機会とした点にも触れる。最後に、静岡サレジオ高等学校の事例に触れる。それは課外活動として生徒が自由に探究したい課題を持ち寄り、NPO 職員と共に進める主体的な学びである。また、NPO 法人聖母の支援企業でのボランティアを通して、推薦入試や大学入学後の活動にも繋げる例を紹介する。以上により、現代社会の教育と、カトリック教会が結合する活動の姿にヒントを得て頂くと同時に、カトリック学校教育で有意義な教材創成の機会になれば幸いである。

1 三つの事例

1 サレジオ学院中学校高等学校のフェアトレード商品販売

2020 年 9 月、学校付の司祭で課外活動のカトリック研究会の顧問から、NPO 法人聖母までお電話を頂いた。その際、生徒がフェアトレード商品の販売を学内でしてみたいという希望を伝えられた。はじめはフェアトレードチョコレートを販売してみたかったが、卸価格が高かったり、商品を卸してくれる団体が見つからなかったりの理由があり、コーヒーを取り扱っている NPO 法人聖母のブランド、Warm Hearts Coffee Club に問い合わせを頂いたのである。その後、カトリック研究会として実施する際、その商品の背景、フェアトレードの仕組み、商品提供者の思いなどをくみ取る必要があるとの生徒の意向から、オンラインにてインタビューが実施された。内容をまとめ学校に活動提案書を出し承認を得た後、生徒たちが商品の販促の場を保護者、学校関係者に対して作り、生徒が事前に受注管理を行った。生徒たちはその受注数を NPO 側に報告し、NPO 法人聖母は商品の焙煎、発送、商品の梱包などを行い、学校の推薦するフェアトレード商品、マラウイの給食支援になる商品として保護者、学校関係者に提供した。

この結果、生徒たちは特に下記の 3 つの点を学ぶことができたと考えている。1 つは、Talent（才能）についてである。それぞれの生徒が各々適した役割を感じ自ら動くことで、商品についての情報をまとめて発信する広報、外部団体に発注し在庫管理をする交渉などの仕事ができるようになる。そこには、自らの Talent への気づきがある。

2 つ目は、チームワークである。それぞれの才能が一つになって共通した目的にために動くことで、組織で動き物事を達成することを学んでいく。現在、バカロレアの CAS プロジェクトの中でも、こうした協働は重要視されている。[5] また、カトリック教会においても、シノドスにおける違いを越えた協働や人を中心にした教育という側面で、重要な点となる。[6]

3 つ目は、人の役に立っている、立てるかもしれないという自己肯定感である。これは単純に「わ

くわくする」というカジュアルな言葉でもいいだろう。人は誰でも自分が新しいことを始め、それが社会に影響を与えるかもしれないと考えると、純粋にわくわくする。この感覚が、いわゆる社会起業家やソーシャルビジネスを実践する人々の動機の原点になる。キリスト教では、信仰に基づいた実践を伴う愛のことを、「チャリティ」と呼ぶ。この言葉はラテン語で Caritas となり「愛」を意味するが、「神の人間に対する恩恵的愛とそれに応える人間の神に対する感動」という定義がある。[7]

画像① アタカ通商株式会社訪問の様子

その後、この言葉はより実践に結びついた形で解釈され、「チャリティコンサート」などのように具体的な司牧現場でも良く使われている。 実践神学的に言葉を解釈して考えると、チャリティはマザー・テレサの Missionaries of Charity のように、実践の中で神に出会う体験をすることかもしれない。現在、サレジオ学院では販売活動を通して商品開発も進め、販売回数は 18 回を数える。コーヒーの生豆を提供するアタカ通商株式会社にも訪問し、企業の持つ使命、なぜそのビジネスに取り組み、どんな世の中を作っていきたいかについても話を聞いた。

それを、キリスト教的な召命の概念にも繋げ、第 47 回カトリック教育学会では、高校生自らが事例発表にも取り組んだ。そんな中で、サレジオ学院は次のステップに進んでいる。それは、Youths’ Coffee Movement である。カトリック研究会の有志は、この活動の精神とカトリック的意味付けを広めるために、全国のカトリック学校に手紙を出した。

2 光塩女子学院の特別講座「NPO の活動を体験してみよう」

次に、光塩女子学院の特別講座「NPO の活動を体験してみよう」を紹介する。講座に参加した生徒たちは中学校 1 年生から高校 2 年生までで、国際支援に少々関心があるのみの生徒がほとんどの状態で始まった。こうした生徒が活動する動機を持つためには、まずなぜ自分がその活動をするのかが腑に落ちる必要がある。それに必要なのは、サレジオ学院でもご紹介した以下の三つの点である。

① 自分が役に立っていると感じられること(Talent)
② 他の人と一緒にやれて楽しいと思えること(Teamwork)
③ 誰かの役に立てている、もしくは立てると実感すること(Charity)

上記の 3 つを包括するアイデアとして考え、NPO 法人聖母が伝えているのは、Charity Begins at Home である。この言葉は自分が出会った出来事、人、つまり「自分の周り」(home)から影響を受けた結果熱意を感じたことから、自分のできるチャリティを始めるということだ。もちろん、この home を「母国」とし「自分の国のための活動から始めよ」という戒めに取る場合もある。

一方で現在のグローバル教育を考えれば、自分の出会った国、人々のためにできることを探すことと考えてもよいだろう。そうして、生徒たちは主体的に行動ができるようになる。

NPO 法人聖母では、いつも初期の段階で NPO 法人聖母代表の山田のマラウイとの出会い、それを取り囲むビジネスについて、さらにそれを通して持ち始めたパッションについて、ストーリーを

語りながら共有している。一番重要なことは、自分が出会った home に対して熱意を持って行動できる大人(role model)を知ることである。

講座の中でまず自分のリーダーとなる role model と出会う。そしてその人物と企画創設、活動を通して自分のできることが徐々にイメージ化され、自らの才能(Talent)に気づき、それを他者に共有して Teamwork を作り上げる。そこまで行くと、これから自分たちができることにわくわくする。その時は既に自らの心の中に Charity と呼べる実践となる愛に近い感覚を、支援先の国の人々に持ち始め、それは精神的には生徒の home になる。

その Charity の活動が向かう先は、もっと多様性に満ち場合によっては試練が待ち受ける社会(Society)になる。そのため、授業の中ではかならず NPO 法人聖母の支援企業である英国企業 Mobell のインターンによるマーケティングの授業、マラウイ現地で働く JICA スタッフ、マラウイ人で給食支援に実際に携わる人に入って頂き、生徒の学習内容に対して、アドバイスをもらっている。

講座の中では、まずマラウイというアフリカの最貧国のマイナスのイメージではなく、プラス面を発信している。いかに人口が多く若い国で、英語が話せてコミュニティを大事にする温かい心を持っている国であるかを強調する。

貧しい国であることや、社会課題にも触れるが、先にマラウイの良いところを示し、日本の豊かさとは違う価値観に触れ、学べる点に気づき後に実施する商品のブランディングに役立ててもらう。以上のような、日本を相対化する学習、支援活動に向けての意見の創出を経て、社会へのアプローチ方法を考えていく。その社会への理解を含める手段として、経済(Economy)に注目し、具体的なアプローチは経済活動を用いることになる。そこで詳しく紹介していくのが、NPO 法人聖母の実施している寄付型コーヒーブランド Warm Hearts Coffee Club の商品とそのビジネスモデルである。[8] 生徒たちはその仕組みを知った上でグループに分かれ、販売による支援活動を行う段階に進む。

- 全体統括リーダー（高校 2 年生）
- 校内広報班（校内でのポスター掲示や事前お知らせの作製）
- 販売班（当日の販売シフトの調整、コーヒーの作製の補助）
- ブランディング班（ドリップバックのブランドデザイン作製）

全体の構成としては、生徒が講座内で学校のカトリック的建学の精神、自らの活動にかけた思いなどを具現化したブランドを考え、それを販売班に共有し具体的な活動のイメージを持ちながら、校内を中心にその商品を告知するという形となる。完成したのが、以下の画像②のデザインである。

上記の商品を販売し、実際に学校の親睦会では約 5 時間で 201,000 円の売り上げを達成し、マラウイの学校給食分として送金した結果、現地の給食で約 13,440 食分の支援となった。生徒たちはこうした活動を通して、具体的に社会の経済活動の一端に触れ、次の 3 つの点に気づいていった。1 つ

画像② デザイン

目は、社会における経済の仕組みは、多くの人々で成り立っていることである。1 つの商品を販売する上でも、仕入れ会社、販売事業社、支援企業など、多くの人々の繋がりがある。2 つ目は、それを購入する人との繋がりである。自分が魅力を感じている商品を売るためには、来店してくれた方との適切なコミュニケーションが必要である。経済活動が多くの人と繋がり消費文化があることを実感できる。3 つ目は、その社会を支えている環境(Ecology)への気付きである。コーヒーのパッケージは、その劣化を防ぐために日本ではプラスチックが使われざるを得ない。その中でどのように環境に配慮したパッケージを作製し、他の業者と協働して工夫ができるかを考えている。

画像③ 高円寺教会にて
カリタス学園、光塩女子学院の協働

こうした気づきは、経済に対するアプローチからさらに発展し、それを取り巻く環境に対する学習にも繋がっていく。教皇フランシスコによる“*Laudato Si*”を土台とした教育の重要性も、導入部でお話した“*Global Compact on Education*”に繋がるだろう。Ecology 教育は、単なる環境問題ではない。経済活動を含むそれを取り囲む人々の行為や商品の在り方、消費文化における人々の倫理にも及ぶのである。

この講座の最後には、上智大学から教育学の准教授をお招きし、活動の評価をする機会を設けた。中学 1 年から高校 2 年生までが同時に活動する NPO との連携講座であり、次の学年にも引継ぎを考えている点でも、サステナブルな教育としての題材となった。

同時に、光塩女子学院にとっても上智大学との繋がりが強化できるメリットがあり、そして大学側も新しい教育プログラムを高校に紹介できるメリットともなった。NPO が仲介し、高大接続に繋がる可能性も感じている。

他にサステナビリティに繋がっているのは、隣接する高円寺教会にて販売企画の宣伝を世界宣教の日に実施し、バザーでの出店も行った点だ。普段、教会と学校が協働する機会がなかったが、NPO の仲介で司牧的にも重要な取り組みが実施できた。

3 静岡サレジオ中学高等学校「サーバントリーダーズ」

この課外活動は、生徒自らが一から関心のある課題をニュースや自分の周りの環境から取り入れ、活動時間にその課題を共有し具体的な取り組みにしていくものだ。NPO 法人聖母は、この活動にアドバイザーとして、アイデアを形にするための手伝いをする形で参入させて頂いている。以下ではそのうち 2 つの例を紹介する。一つは、マラウイで初めて撮影された映画『風を捕まえた少年』を視聴し、環境問題に関心を持ち、SDGs に関するブログ記事を作成した例である。

もう一つは、海外生活経験がある英語のレベルが比較的高い生徒に対して、NPO 法人聖母の支援企業の人脈を用いて、マラウイ、英国、ポーランドなどの海外スタッフと実施するインターンシップ体験を提供し、推薦入試に利用した上で大学入学後も活動を続けている例である。

まず、SDGs に関する学習を実施した高校 1 年生の例から紹介したい。彼女は、農村コミュニティに対して自家発電装置を考え出し、電力で水を引いてきて、干ばつから共同体を救ったマラウイの

少年についての本を、静岡サレジオ高等学校で実施した「絵本プロジェクト」で知った。その本のタイトルは、『風を捕まえた少年』である。その結果、学校で学習した SDGs のゴールが複数交差し、国際支援に関心を持ったと言う。そのため、NPO 法人聖母はその関心を具体的な成果として形にするために、SDGs に関するブログを、給食支援と関連させて作成してもらうことにした。その記事内にマラウイの支援に繋がるコーヒーの販売サイトに繋がるアフィリエートリンクを挿入し、具体的に彼女のブログ記事の影響力が注文数、寄付額で測れるように設定した。[9]

上記の活動がきっかけで、彼女は高校 1 年生の 11 月から使われていない空き地を使い、有機野菜を栽培し、自然環境とのふれあいで SDGs に関する体験学習を深めている。それを国際バカロレアのコア科目である CAS にも繋げている。このようにして、1 人では困難なプロジェクトも、NPO から得た題材や人脈によって、学校内でも認証を得られる具体的な題材とすることができる。

最後に紹介する事例は、NPO 法人聖母の支援企業 Mobell のインターンシップに参加して英語、ビジネススキル、貧困課題を現地の人から学び、その経験を推薦入試に生かした上で大学生になってからも活動している学生についてである。

はじめに彼の NPO 法人聖母との協働の経緯について説明する。彼はコロナ渦の影響を受けた高校 2 年生時に、英語の国際支援について学べる教材を探していた。その際、受講料はマラウイの給食支援とマラウイ人の雇用のために使用される Mobell のオンライン留学プログラムに、学校の先生の紹介で参加した。NPO 法人聖母の支援企業であり、参加費がマラウイへ寄付され、ビジネスと現地の貧困課題をマラウイ人から学習できる利点があり、学校側も積極的に勧めて下さった。生徒のレベルに合わせて海外の支援企業や実際に給食支援を展開するマラウイ人との交流も、国際 NPO の利点となる。[10]

その後、この生徒は上智大学の国際教養学部に入学し、NPO 法人聖母のボランティアとして活躍している。この例で読み取れることは 2 つある。1 つは NPO が学校と生徒の間に入り、探究が継続できる点である。中高一貫校の場合、6 年間で長期間学習や体験を深めそれらを大学入試の際の小論文や面接にも生かすことができる。NPO が同伴することで、大学入学後も入試で培った力を生かすことができ、後輩の高校生の大学への架け橋も促進できる。

2 つ目は、将来的に日本の推薦入試の質が上がり、大学入学後の学習に影響を与え、社会に出る人材としても大きな影響を及ぼす可能性がある点である。現在の高校生が企業に入社する頃は SDGs や ESG 投資などは当たり前になり、AI の浸透から雑務は少なくなり、会社のビジョンを具現化できる力が重要になる。よって早期から SDGs を例に、多くの社会に開かれた企業の在り方を学ぶ必要があり、NPO 法人聖母のようなアフリカ支援団体とのメリットがある。

結論

以上、3 つの学校の事例から、NPO が連帯するカトリック学校の学習プログラムについて紹介してきた。最後に、NPO の「第 3 の場所」としての役割について触れ、この実践報告書のまとめとしたい。「第 3 の場所」という言葉を最初に使用したのは、社会学者のレイ・オルデンバーグで、“*The Great Good Place*”の中での表現である。私たちは、決められた会社のオフィスではなく、カフェな

ど自分で決めた場所で、積極的に建設的な働きをすることで、単に会社の一部として静的に存在しているのではなく、もっと自ら決断して動く個人としても、自分を意識することができる。カトリック学校の生徒にとっても、NPO などの第三組織がそのような場所になっていく可能性がある。NPO は「第 3 セクター」と呼ばれ、企業、政府に対して 3 番目に来るものである。カトリック学校の生徒にとって、本来 3 つの場所は学校、家、教会かもしれない。しかし、現在は教会との関係は薄くなり、グローバル教育や実学が偏って重視され、アントレプレナー教育や国際教育だけが先走っているケースもあるだろう。そんな中で、カトリック学校の生徒にとって 3 つの場所は、まず学校、家、NPO でもいいかもしれない。そうすることで、生徒にカトリック学校での活動が影響を与え、召命に繋がる体験の種がまかれるだろう。[11]

参考・引用文献

1 Pope Francis "*Global Compact on Education*" Vademecum English.2019, pp.4-5.
https://www.educationglobalcompact.org/resources/Risorse/vademecum-english.pdf

2 大貫隆、名取四郎、宮本久雄編、百瀬文晃編『岩波キリスト教辞典』岩波書店、2002 年。

3 Oldenburg, Ray. "*The Great Good Place : Cafes, Coffee Shops, Bookstores, Bars, Hair Salons, and Other Hangouts at the Heart of a Community*" Hachette Books .1999.（邦訳：レイ・オルデンバーグ『サードプレイス――コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』みずす書房、2013 年）

---

1 総合学習は、高橋亜希子『戦後の学校教育における総合学習の歴史的変遷――青年期の「学び」の回復としての試み』（中央学院大学社会システム研究所、2008 年）より。https://cir.nii.ac.jp/crid/1050282677877542784

2 Pope Francis "*Global Compact on Education*" Vademecum English P4-5 を参考に記載。今後、第 47 回カトリック教育学会全国大会に向けて、具体的な文書の教育現場での活用方法を研究する。
https://www.educationglobalcompact.org/resources/Risorse/vademecum-english.pdf

3 詳細は、以下の Warm Hearts Coffee Club のウェブサイトを参照。www.charity-coffee.jp

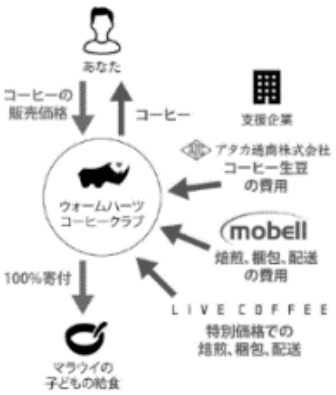
4 英国通信会社 Mobell はグローバルに通信事業を展開しており、同時にマラウイ支援を中心にした英国のチャリティ法人、日本の NPO 法人を自社で展開する社会的企業である。詳しくは、以下のウェブサイト。www.mobell.com

5 国際バカロレアの制度については、以下を参照。
https://www.ibo.org/globalassets/new-structure/programmes/dp/pdfs/cas-2017_jp.pdf

6 シノドスは日本の公式見解として、以下のカトリック中央評議会のウェブサイトを参照。（カトリック中央評議会トップページから、「カトリック教会」より「聖年・特別年」の項目にて「世界代表司教会議（シノドス）第 16 回通常総会」の内容を見ることができる。）https://www.cbcj.catholic.jp/catholic/holyyear/synod2023/

7 大貫隆、名取四郎、宮本久雄編、百瀬文晃編『岩波キリスト教辞典』岩波書店、2002 年、p.240、項目名「カリタス」を参考。

8 サレジオ学院作成の Warm Hearts Coffee Club のビジネスモデルが右の図。



9 アフィリエートは一般的には「成果報酬型広告」と言い、サイトやブログ記事に貼ったリンク経由で商品購入されると、成果に応じた報酬を得られるものです。これを寄付型で活用し、生徒たちがどれくらい寄付を募れたかを図る評価対象にしている。

10 Mobell のインターンコースは、日本国内の高校生、大学生にとどまらず、海外の多くの学生に利用され、参加費がチャリティになる点もあり紹介が学校機関でもされやすい。www.mobell.com/jp/course/

11 「召命」の概念は『岩波キリスト教辞典』（岩波書店）の P561-P562 を参考にした。「世俗のただ中で従事する職業も神から受けた使命である」と、プロテスタントの職業倫理の影響も受けて、エキュメニカルな解釈の使用例にしている。